横須賀市博研報(人文)　Rept.Yokosuka City Mus., No.(69):63-78.Mar.30, 2025

横須賀市長坂堀越地区の年中行事　－髙橋豊家氏の記録を中心に－

原田保子*　瀬川渉**

The annual events of Nagasaka Yokosuka

HARADA Yasuko　SEGAWA Wataru

This article describes the annual events of Nagasaka, Yokosuka during the Showa period, based on materials written by Mr. Toyoie Takahashi (born in 1925), who lived in Nagasaka, Yokosuka, and interviews with relatives.　Research Report No. 68 published last year, also talked about farming in Nagasaka, Yokosuka, and this article is a sequel to that.

＜はじめに＞

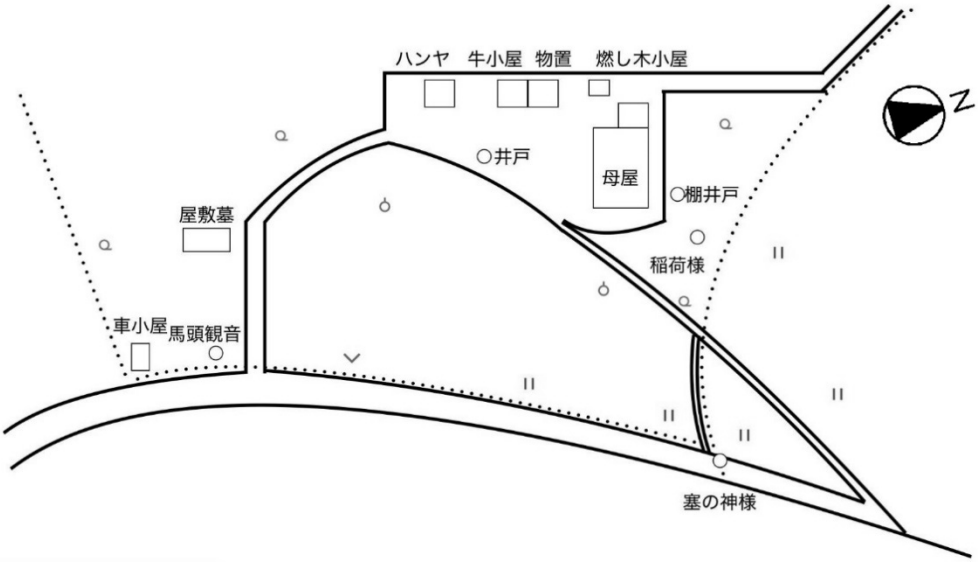
横須賀市長坂堀越地区は、現在の長坂３、４丁目の一部地域で、祖母神社の北側に位置している。かつては堀越耕地と呼ばれる水田を中心に、十数件の稲作農家の点在する集落であった。昭和１５年には、堀越耕地に旧海軍射撃場が建設されることになり、７軒の住宅と１箇寺が地域内外に移転した。戦後も堀越地区はほとんどが専業農家であったが、昭和４０年ころからは、徐々に農地の宅地化・雑種地化が進み、専業農家が減り、米作りが行われなくなり、昔ながらの年中行事も行われなくなっていった。

大正１４年長坂堀越地区の農家の長男として生まれた髙橋豊家（令和３年に満９６歳で他界）は、平成１３年の正月、２１世紀の始まりであり自分自身にとっては数え年７７歳という節目の年でもあるので、これを機に堀越地区の消えゆく昔ながらの年中行事などの記録を残したいと考え、自らの日記やメモをもとに、子や孫、地域の若い人たちに語り伝えたり、昔ながらの行事を復元して写真や映像に残したりしはじめた。

本稿は、それらの記録をもとに長坂堀越地区の昔ながらの年中行事についてまとめたものである。なお、豊家の長女である原田保子が親族や近隣住民から聞き取った内容や原田自身の記憶も補足として加えてある。特に「５　端午の節句」については、主として原田の体験をもとに記述している。

---

*おおくすエコミュージアムの会　**横須賀市自然・人文博物館
原稿受付　2025 年 1 月 11 日　横須賀市　博物館業績　第 794 号
Key Word: Nagasaka Yokosuka, Annual events, Sumo held in the Miura area
キーワード：横須賀市長坂　年中行事　三浦相撲



【略地図】

1　お正月

＜正月飾り＞

正月飾りは一夜飾りと九日飾りを避けて１２月３０日に飾るのが一般的だが、堀越地区では３０日にお飾りを造り、飾り付けは翌３１日の朝に行う。二日がかりで制作するから一夜飾りではないと伝えられている。お飾りの材料には、自家の山から切り出した松や竹、榊などと、その年に収穫した稲藁を用いる。

門松は母屋正面に一対建てる（写真１）。杉の杭を支柱として打ち込み、その周囲に松・マダケ・榊を藁縄で結び付け、根元には松の太い幹を三角形に並べて置くのが古来の様式である（写真２）。門松以外にも、屋外・屋内の決まった場所に正月飾りを施す。

【写真１】

【写真２】

納屋・作業小屋など屋根のある建物すべての入り口に松の小枝を差し輪飾りを飾る（写真３）。井戸神様と呼ぶ庭の井戸（写真４）、先祖代々の屋敷墓、自家で祀っている馬頭観音、近隣の３軒で祀っている賽（さい）の神様＜セーノカミサマ＞（写真５）にも同様に飾り付ける。屋敷林の稲荷様には門松と注連縄を飾る。稲荷様の注連縄は左綯いで作り、下げは１２本で、間に半紙で作った紙垂（しで）を挟み込む（写真６）。写真１は昭和４１年、萱葺屋根時代の髙橋家の門松である。この年髙橋家では稲荷講当番であったので、門松と一緒に稲荷講の幟も建ててある。

【写真３】

【写真４】

【写真５】

【写真６】

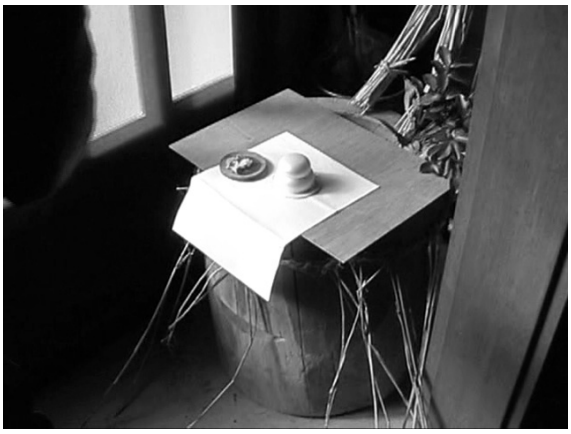
屋内の飾りとしては、まず座敷の周囲に注連縄を張り巡らせる（写真７）。座敷には神棚が３か所あり、座敷の上り口に近いところには牛馬の神様である蒼前様（そうぜんさま）、正面向かって右側には歳神様、左側には大神宮様（天照大神）・氏神様（長坂の祖母神社）・大山様（大山阿夫利神社）が祀られている。神棚のそれぞれの神様をお迎えする位置に藁で作ったサンマタを据え、その前に半紙を敷いてお供え餅を置き、両脇に松を飾る。歳神様のとこ

ろには、先述の３点の他にお供えを載せるためのお膳を置き、５膳の箸を添える。箸はカツノキ（ヌルデのこと）を削って作る（写真８）。なお、カツノキの箸は家族分も作り、正月三が日の間、雑煮を食べる際にはその箸を使用する。

【写真７】

【写真８】

座敷以外にも昔囲炉裏のあった部屋の神棚に大黒様､かまどのあった部屋の神棚に荒神様が祀られているので同様にお飾りをする｡餅つきの臼には臼神様が宿っていると伝えられており、土間に据えて、注連縄を張り他の神々と同様にお飾りをする（写真９）。髙橋家の場合は以上のとおり屋外１１か所、屋内８か所に正月飾りを施す。



【写真９】

＜正月行事＞

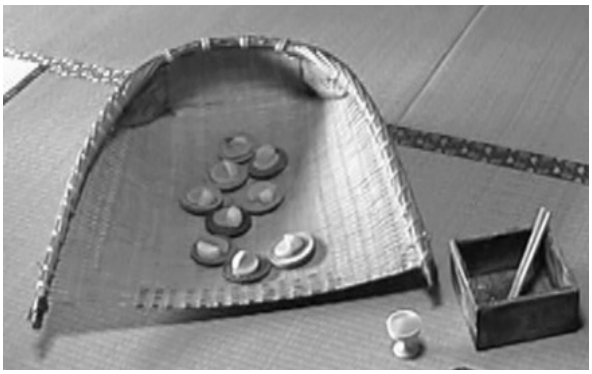
元日から１月２８日までが正月で、長坂堀越地区では、次のような正月行事が受け継がれてきた。

◎正月三が日

元旦から三日間は朝と昼に神棚・仏壇・門松・屋外の正月飾りをしたところ全てにお供えをする。お供え物は、朝は雑煮の具の大根と里芋、昼は大根ナマスと白飯である。神棚にはザッキと呼ばれる木製の平らな器に盛り、箕に入れて運び届ける（写真１０・１１）。屋外のお供えは、一升桝に入れて運び、松の枝先に直接載せる。

伝統的な雑煮は、醤油味のすまし汁仕立てで出汁は切り昆布と油揚げ、切り餅を焼いて入れる。具はいちょう切りまたは半月切りの大根と里芋のみだが、家族の盛り付けの際は出汁

の油揚げと切り昆布も添える。鶏肉や鰹節などの動物性食品や三つ葉や小松菜などの青物を一切入れないのが特徴で、大根ナマスは大根の千切りに軽く塩を振って絞り、味噌と酢のみで味付けをする。



【写真１０】

【写真１１】

家族の食事はお供えが終わってからで、三が日の朝昼はお供えと同じもの（別におせち料理等も）をいただいく。

◎松飾り下げ　1月４日

朝、三が日と同様に雑煮の具をお供えしてから門松を始めとする全ての正月飾りを取り外す。庭の門松を取り外すと杭を抜いた後に穴が空くが、２８日まではそこに門松の松の枝を一枝差しておく。

◎六日年越し　1月６日

古くは７日を七日正月と言い、その前夜の６日は六日年越しと呼ばれていた。六日年越しの夜には自然薯のとろろ汁をご飯にかけて神棚にお供えし、家族も同じものをいただく。とろろ汁は味噌味でご飯は押し麦を混ぜて炊く。

◎七草　1月７日

朝、「七草粥」を神棚と自家のすべての果樹の幹に供える。堀越地区では、「七草」といってもいわゆる七草ではなく小松菜を用いる。おかゆを作るときには、まな板に小松菜を載せて「七草ナズナ、唐土の鳥が日本の国に渡らん先にスットコトンとたたけ」と唱えながら菜切り包丁で叩く。家族は小松菜入りのお粥に焼いた切り餅を加えて盛り付けたものをいただく。なお、新年に入ってからこの日までは青菜類を食べないのが昔からの習わしである。但し、暮に仕込んだ白菜漬けだけは構わないとされていた。

◎サイト　１月７日

賽の神様を共同でお祀りしている家の家族が大人も子どもも揃って参加し、賽の神様の近くの水田で、正月のお飾りや古いお札を焼く。その際には賽の神様の祠の子産石も一緒に焼く。門松と一緒に書初めの書き損じを焼くと字が上手になるとか、お飾りを焼く火に手をかざすとしもやけにならないなどと言い伝えられていた。お飾りを焼いた後は熾火（おきび）で餅を焼き、参加者みんなで食べる。この餅を食べると風邪をひかないと言われていた。

賽の神様の祠の屋根は、道路拡張による移転に伴いコンクリート製になったが、それ以前は、毎年この時に新しい杉の葉で葺き替えた。

◎お鏡開き　１月１１日

乾しておいた鏡餅を細かく割って焼き、この日の朝、神棚に供える。鏡餅を割ることを「ひらく」と言い、刃物は使わない。家族は朝、焼いた鏡餅入りの雑煮を食べる。雑煮の具や味付けは三が日と同じ。

◎十四日年越し　１月１４日

十四日年越しは小正月の前夜を年越しとして祝うものである。朝、十四日餅を搗いて飾り、夜には神棚に年越し蕎麦（註１）を供える。そして、夜は家族も年越し蕎麦をいただく。

十四日餅は「もめん餅」とも言い、座敷に堅木（主にクヌギ）の枝を据え置き、枝先に丸餅を花のように飾り付ける。(写真１２）　餅は白とヨモギ入りの草餅の２種類。小正月の翌日である１６日の朝には片付ける。木綿餅ではなく、竹とヌルデの木で造った「アーボヘーボ」を屋外に飾る家もあった。また、木綿餅もアーボヘーボも飾り付けはせず神棚に上げるだけの家もあった。木綿餅もアーボヘーボもともに豊作を祈願するためのお飾りと伝えられ、髙橋家の場合は木綿餅を飾り付け、アーボヘーボは神棚に上げていた（註２)。

註１：堀越地区のほとんどの家では蕎麦を栽培せず、小麦を栽培していたので、「そば」とは言うものの自家製小麦の粉で打った「うどん」をお供えした。大晦日の年越しそばも同様であった。

註２：豊家の日記によると、髙橋家では木綿餅は平成の時代に入っても搗いていたが、飾り付けはせず神棚に上げるだけになっていた。アーボヘーボを上げたことが記されているのは昭和３４年が最後である。

【写真１２】

◎小正月　１月１５日
旧暦では、この日が新年最初の満月である。小正月の朝は小豆粥を炊いて神様にお供えし、家族も同じものをいただく。

◎正月の終わり　１月２８日
朝、神棚に小豆粥を供え、家族も同じものをいただく。門松の跡に差しておいた松の小枝を片付けると、正月行事の全てが終わる。

２　節分

＜節分の飾り物＞
節分の当日、豆まきに先立ち、鰯の頭を黒焦げに焼いて柊の小枝に突き刺し、玄関扉の外側に差すようにして飾る。鰯は生のものまたは大きめのめざしを用いる。

＜豆まき＞
豆は自家の畑で育てた大豆をイリガラと呼ばれる厚くて大きな浅型の鉄なべで炒る。豆を炒るときには、「豆ガラ」を用いる。豆ガラとは、大豆の豆を収穫した後に残る豆の木のことで、カシャカシャと音がするので、鰯を焼く臭いにおい、柊のトゲと同様に鬼の苦手なものだと伝えられてきた。豆が香ばしく炒り上がったら、一升マスに入れておく。撒く人は一家の主人で、掛け声の「福は～うち、福は～うち、鬼は～そと。」を、繰り返す。撒く場所は以下の番号順である。

１. 浅間様（射撃場の東側にあり、祖母神社に合祀されるまで堀越地区の氏神様であった社）
２．屋敷墓　３．屋敷林の稲荷様　４．母屋の屋内

母屋では、家族が揃って見守る中で、奥の方から玄関に向かって全ての部屋に撒く。全部の部屋に撒き終えたら、各自自分の年の数の豆を畳の上から拾って食べる。その後、室内に残った豆を箒で掃き集める。残った豆は炒り直して、甘いおかず味噌やきな粉などに活用した。

３　稲荷講

＜稲荷講とは＞
自分の家に稲荷様を祀っている家で組織された講中が執り行ってきた祭事である。もとは、初午の日に行われていたが、昭和の時代は２月１１日に固定して行われていた。
稲荷講に関して、昭和２１年２月１１日の豊家の日記には次のような記述がある（原文で

は〇〇家ではなく実名が記されている)。

２月１１日（月）曇 「〇〇家」にて稲荷講。朝、餅つきに行き、引き続き同家にて祭典に参加す。 １１人割として３０円。

また、稲荷講に関しては、町内の有志に依頼されて豊家がその概要を語った際のメモが以下の通り残されている。

＜「稲荷様」と「稲荷講」に関わる長坂・荻野の言い伝え＞

平成２１年２月　　髙橋　豊家

「稲荷様」

その昔、稲荷様は唐天竺より稲穂をマタ倉に隠し持ち帰り、この国の稲作りの種とされました。稲荷様は、稲作りの神様として信仰されています。また、泥棒よけの神様としても信仰されています。それぞれの家・社・寺で、家・境内の裏山や裏側等にお祀りをして信仰信心をしています。

「稲荷講」

稲荷様を信仰する人たちが仲間づくりをして、毎年１回節分後の初午の日を「稲荷講の日」と定め、仲間（＝講中）で１軒ずつ順番に当番となり、その家で酒肴を供し宴会を開きます。宴会に先立ち、神主さんやお坊さんをお迎えして祝詞（のりと）・お経をお願いし、仲間たち皆で一緒にお参りします。その後、神主さんやお坊さんにも参加して頂いて宴会となります。所によると、仲間たちの家族全員で当番の家に集まり、「ナベカケズ」と言うことで、宴会にも参加したとも聞いております。

※参考

①その家の信仰で、例えば伏見稲荷等有名社寺の信徒となり、官（例：正一位〇〇稲荷）を頂き、稲荷様をお祀りしている家もあります。

②往年２月１１日が「紀元節」となり、以来、この日に稲荷講を開く講中もありました。

③稲荷講を水田耕作開始の日とする家もあります。

④特に他人の農地を借りて耕作（小作）するときは、農地の貸借は稲荷講を日限として、停止・延長の約束日となっていました。

4　桃の節句

３月３日の桃の節句は「女の子のお節句」と言われ、女の子が健やかに育つことを願う行

事だと伝えられてきた。女の子のお節句には、まず、ひな人形を飾る。雛人形は、長女の誕生を祝って母親の実家から段飾り一式が贈られた。

実家以外の親戚からは、添え人形と呼ばれる「這いずり人形」「高砂」「藤娘」「市松人形」などの人形が贈られた。雛人形は、その家の物なので、二女以下の子たちに新たに段飾りが贈られることはない。添え人形が贈られることはある。

ひな人形を飾る日は、立春を過ぎて良く晴れた日の、大安や友引などの日を選ぶ。飾る場所は「奥の間」の床の間の前。人形を飾り終えたら、庭の桃の花を飾り、自家製のひなあられ・甘酒をお供えする。３月３日にはちらし寿司とハマグリ（またはアサリ）のうしお汁をお供えし、家族も同じものをいただく。お雛様のごちそうは、仏様にもお供えしたが神様にはお供えしなかった。

お雛様を片付ける日は３月３日以降の良く晴れた日が選ばれた。なるべく早く片付けないと、娘の婚期が遅れると伝えられていた。

５　端午の節句

５月５日の端午の節句は、「男の子のお節句」で、男の子が健やかに育つことを願う日だと伝えられてきた。お節句に先立ち、４月中頃から庭先にこいのぼりを建てたり・屋内に鎧兜・武者人形を飾ったりした。こいのぼりや人形等は長男の誕生を祝い、母親の実家を始めとする親戚一同から贈られた。

＜厄除けの屋根飾り＞

端午の節句には、母屋の屋根に菖蒲・ヨモギ・カヤで作った厄除けの飾りを施す（写真１３）。材料の植物を根元から刈り取って、３種類各１本ずつを一まとめにして、細めのカヤで束ねる。同じものを３組作って、母屋の軒先に横１列に揃えて茅葺の茅の間に差し込み飾りが完成する。飾る日は、５月４日の夕方である。

【写真１３】

＜神様へのお供え物は柏餅＞

端午の節句のお供え物は、柏餅。長坂堀越地区では、「おかしわ」と呼んでいた。

材料は上新粉・こし餡で、包む葉は柏の葉ではなく、青々としたハリギリの葉であった。ハリギリは屋敷林などに自生していた。上新粉はうるち米の粉。自家で収穫した米を「搗き場（つきば）＝（精米所）」で粉にしてもらった。こし餡は自家の畑で収穫した小豆を前夜のうちに煮て準備しておいた。

５月５日朝食後に、家族みんなでおかしわを作った。作り方は、お湯で溶いて捏ねた上新粉をせいろ（蒸し器）で蒸し、蒸し上がったら餅のように臼と杵でつき、ふんわりさせる。搗いて、ふんわりとしたおかしわの生地を１個分ずつに千切るのは母の役目。子どもたちは生地を掌の上で楕円形にのばす人、スプーンで餡をすくって生地の上に乗せる人、ハリギリの葉を広げて包む人などと分担し、流れ作業で作り上げた。出来上がったおかしわは、父が「ザッキ」に乗せ、箕（ミ）に入れて持ち運び、家の中に祀られている神々や仏様・稲荷様にお供えした。お供えが終わったら、お茶を淹れ家族揃って、おかしわをいただいた。

＜しょうぶ湯に入る＞

５月５日のお風呂は、しょうぶ湯。風呂桶にショウブの葉を結んで浮かべてあって、よい香りがしていた。無病息災を願う風習として昔から続いてきたと教えられた。

６　浅間様のお祭り

祖母神社が村社となる前までは、長坂の各集落にはそれぞれの氏神様が祀られていた。堀越地区の場合は、現在の自衛隊射撃場の東側に隣接する「浅間社」が氏神様であった。浅間様のお祭りは７月８日であったが、昔は浅間講の仲間でこの日までに田植えが終わらない家があると手伝いに行った。半数以上の家が終わらないようなら、浅間様のお祭りを１０日か１１日に延期した。

明治政府の一村一社令により村社祖母神社に合祀後も堀越地区ではお祀りし続け、古老達のいた昭和の後半期までは７月８日には神官を要請し、神事を行ってきた。現在も堀越地区の各戸では、それぞれに節分の豆まき等にはお参りをしている。

７　お盆

＜お盆の行事＞

長坂では、８月に、以下のようなお盆の行事が行われる。

◎墓掃除　８月１日

屋敷墓の周囲の草を刈り墓地の掃除を念入りに行う。

◎盆飾り　８月１３日

午前中に仏壇の飾りつけをする（飾り付けの方法は後述のとおり）。

新盆の場合は、仏壇の飾りつけに加えて、８月１日に竹と杉の葉で作ったタカドウロウを庭先に建てる。更に、三角袋、草履、扇子、おひねりを麻ひもで結んだ「新盆飾り」

【写真１４】

(写真１４、令和３年施主豊家、妻の新盆)を菩提寺に届ける。三角袋には米１升を入れ、表に新盆の仏様の戒名と施主名を墨書する。おひねりには、六枚の硬貨を包む。なお、タカドウロウは３回忌までの新しい仏様のために建てたと聞いている。髙橋家の場合は、昭和２９年に豊家の亡母のために建てたのが最後であった。

◎新盆念仏　８月１３日

夜、念仏講の講中の家で１年間に亡くなった人があった場合その家に講中が集まって念仏会(ねんぶつえ)を行う。堀越地区の念仏講の講中は、地区内の浄土宗と浄土真宗の檀家の集まりで、毎月１４日に講中の各家持ち回りで念仏会を行っていた。

◎施餓鬼会（せがきえ）　８月

菩提寺で行われる。（浄土宗の場合）

◎精霊送り　８月１６日

朝、「おしょうろうさまをおくる」といい、盆飾りを片付け、土産団子を添えて自家の所有地と接する一番西側の道(畦道)の三叉路脇に置きに行く。

◎タカドウロウ流し　８月２４日

早朝、タカドウロウを片付けて近くの川に流す。髙橋家の場合は下川(シタガワ・前耕地川中流)に流した。

◎盆供（ボンク）　８月

新盆の場合は８月１日に、それ以外は８月１３日から１５日の間または８月中に、自分のご先祖様の祀られている親戚を訪ね仏様にお参りし、「お盆供」と書いた掛け紙付きのお供え物を供える。お盆の来客に食事を出す場合は、「そうめん」が定番であった。

＜昔ながらの盆飾り＞

長坂堀越地区のお盆の昔ながらの仏壇の飾りつけは、以下の通りに行われてきた。

◎飾り棚をつくる

・チガヤを採取し、縄１本とゴザ２枚を作る。

・畳から天井まで届く長さの女竹を３本切り出し、２本を仏壇の両脇に立て掛け、１本を上部に架け渡して飾り棚を作る。上部に渡した竹にチガヤで綯った縄を巻き付ける。

・チガヤで編んだゴザ（註３）の１枚を仏壇上に、もう１枚を仏壇前に置いた経机に敷く。

◎お供え物を供え、掛軸を飾る

・お供え物は、ホオズキ・稲穂・大豆・とうもろこし・

【写真１５】

柿･栗･夏ミカンなど自家の成りもの。
　全て枝付きで採取し、仏壇に架かっているチガヤの縄に下向きに挟み込む。(写真１５、１６)
・仏壇の両脇に掛軸を飾る。
◎キュウリの馬、ナスの牛を仏壇前の経机に飾る(写真１７)
・牛も馬もご先祖様の乗り物になるので、キュウリとナスは大きめで形の良いものを選び、苧殻（おがら＝麻の茎を剝いて乾燥させたもの)で脚を作る。キュウリの馬は西方からご先祖様が乗っていらっしゃるので頭(成り口)を東向きに､ナスの牛はお帰りの際の乗り物なので、西向きに飾る。往路に馬を､復路に牛を用意するのは、ご先祖様に早くおいでいただきたいのでお迎えは速く走れる馬を、お帰りはなるべくゆっくりが良いので歩みののろい牛を用意するのだと伝えられている。

【写真１６】

【写真１７】

・刻みナスは仏様のご飯だと子どもの頃から教えられてきた。飾り方は、染め付けの深皿２枚を並べて置き、１枚に里芋の葉を載せ、その上にナスを１㎝程度の角切りにして載せる。もう１枚の皿には半分くらいまで水を張って、半紙を巻いたミソハギの束１掴を添える。
・お参りの際は、ミソハギの束の先を水に付け、刻みナスに移すことを３回繰り返す。
註３：当地ではチガヤを「チヤガ」と呼び、お盆のお飾り用に作ったゴザを「チヤガムシロ」と呼んでいた。

８　お月見

　十五夜は旧暦の８月１５日（仲秋の名月）、十三夜は旧暦の９月１３日に行われる。両日ともに農作物の収穫を感謝する行事として、お月様にお供え物をして家族揃って「お月見」をする。十五夜だけ十三夜だけしか行わないことを「片見月（かたみづき）」または「片月見（かたつきみ）」と言い、縁起が良くないと言われている。

長坂堀越地区に伝わるお月見の風習は次のようなものである。

＜お供えする物＞
①稲穂　②木綿豆腐一丁　③海苔巻き寿司　④里芋　⑤季節の収穫物（栗、柿、さつまいも、ナス、など）
※ススキではなく稲穂を、団子ではなく海苔巻き寿司をお供えするのが特徴。
※③～⑤は十五夜には１５または５個、十三夜には１３または３個をお供えする。
＜お供えの方法＞
座敷の縁側に月の見える方角に向けて座卓を置き、端の方に稲穂を飾り、中央に大きな飯台を載せて、その中にお供え物を並べる。豆腐と巻き寿司をそれぞれ適当な大きさの皿に入れて、飯台の中心に置き、里芋以下の収穫物を生のまま見栄え良く盛り込む（写真１８）。神棚にも、稲穂をお供えする。

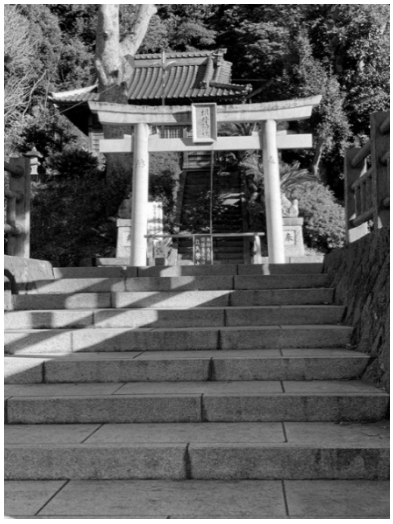
【写真１８】

昭和４年生まれの叔母（豊家の妹）によると、昔はお月見の豆腐は家で穫れた大豆と交換で入手したとのこと。お月見の日には朝、学校近くの豆腐屋さんに重箱１杯の大豆を届け、学校の帰りに重箱に詰められた豆腐を受け取ってくるのが小学生のころの叔母の役目だったそうだ。

お月見のお供え物といえばススキとお団子が定番で、近隣の地区でも古くからススキとお団子をお供えしてきた家庭も多いようだが、長坂の堀越地区では昔から稲穂と海苔巻き寿司をお供えしていたと伝え聞いている。堀越地区では、なぜススキではなく稲穂を、お団子ではなく海苔巻きをお供えしたのだろうか？それには堀越地区ならではの理由があったのであろうが、今となっては聞く術がない。文久２年生まれで、昭和２３年に亡くなった曾祖母は、「十五夜」の日に限らず満月が出ると必ず、お月様に向かって手を合わせて聞き取れないような小声で、長い間何やらぶつぶつと唱えながらお祈りしていたそうだ。満月が信仰の対象だったようである。何をお祈りしていたのやら興味深い。しかし、これも今となっては聞くことはできない。髙橋家では昭和６２年を最後に米作りを辞めた。以来、お月様に稲穂をお供えすることができなくなってしまった。しかし、ススキで代用することはしなかった。

お月見を美しい月をめでる行事としてではなく、収穫を感謝する祭事として位置付けてきた先祖の思いを受け継いだためだと思われる。

９　祖母神社の例大祭と三浦相撲



【写真１９】

長坂祖母神社（写真１９）の例大祭は昭和２０年代の初めまでは９月２０日が宵宮、２１日が大祭と決まっていた。その後「国民の祝日に関する法律」の制定により、大祭の日は祝日の１５日（敬老の日）に移り、更にその後祝日の移動に伴い祖母神社の例大祭の日時も年によって異なるようになった。

「昔は長坂のお祭りと言えば相撲が有名だった」とよく聞くが、祖母神社で奉納相撲が行われるようになったのは、村社祖母神社となってからのことである。長坂のお祭りの「三浦相撲」はもとは石谷戸の若宮社の催しであった。それ故、若宮社が祖母神社に合祀されるまでは長坂の相撲は若宮社に近い旧名主のＦ家で行われていた（註４）。Ｆ家が相撲宿となって料理や風呂などで力士をもてなし、Ｆ家の土間に土俵が造られ、招待客は座敷に座って相撲見物をし、一般の見物客は家の外で立って見ていたという。

合祀後、相撲は祖母神社境内で行われるようになり、長坂青年会（写真２０）が土俵づくり、桟敷づくりをしてマス席を売った。相撲宿は祖母神社近くのＨ家（屋号ハシド）に移った。やがて、鹿島が海軍用地となることに伴い三浦相撲の行司を務めていたＭさん（行司名：木村研造）宅が鹿島から祖母神社の近くに移転になったためＭさん宅が相撲宿となった。Ｍさんは行司のみならず、三浦相撲興行の一切を取り仕切っていた。

祖母神社の奉納相撲は戦争のため一時中断する時期があったり、三浦相撲の力士ではなく、青年会員による相撲のこともあったりもしたが、昭和４３年まで続き、その歴史を閉じた。

【写真２０】

参考資料：

①「祖母神社のゆらい」昭和６０年８月１日　長坂祖母神社氏子会

②「三浦市民俗シリーズⅫ　三浦相撲」平成１０年１０月三浦市教育委員会

註４：若宮社が祖母神社に合祀された時期は、上記参考資料①では明治４１年（１９０９年）７月、同②では明治３９年となっている。

以下は、原田が土地の古老から聞いた話の要約である。

祖母神社の例大祭では神社の境内や周辺に幟旗が立てられ、露店も立ち並んだ。宵宮には「余興」と称して舞台で芝居や踊りが行なわれた（写真２１・２２・２３）。また、お祭りの当日には朝１０時から湯立神楽が行われ、小学校３年生以上の子たちは神殿で神主のお祓いを受けた。参列は自由だったが、みんな「いい着物」を着ていったものだ。女の子は晴れ着に袴をつけ、男の子も袴姿で参列、ムシロが敷かれたきれいな神殿の床に正座し、軽く頭を下げて神主さんの振る幣束が頭の上を通過するのを感じながら祝詞の終わるのを待った。しびれが切れてしまい終わってもすぐには立ち上がれない子もいた。御神楽は午前中に終わり、午後は三浦相撲の興行が行われた。

【写真２１】

【写真２２】

【写真２３】

＜おわりに＞

以上が長坂堀越地区の昔ながらの主な年中行事である。少しずつ形を変えて、現在も継承されているものもあるが、時を経て消えてしまったものも少なくない。

正月飾りに限ってみても、長坂の場合、古くは１２月３０日に長坂の海である斉田浜から海水を汲んできてお供え用のザッキを洗い清めていたが、昭和１５年に斉田浜海岸一帯が海軍用地となって立ち入りできなくなって以来この習わしはなくなってしまった。昭和２０年以降は粟やソバを栽培する家はなくなり、やがて高度経済成長期に入り専業農家が少なくなっていった。米作りを辞める農家も出始め、稲わらの入手が困難となっていった。昭和３８年には長坂の山林ほぼ全域が買収され、伝統的なお飾り用の木々が入手できにくくなった。そして何よりも昔ながらのお飾り造りを継承できる人がいなくなってしまい、昭和の終わり頃には昔ながらの正月飾りは殆ど見られなくなってしまった。

年中行事は、人々の暮らしに根差したものであるのだから、暮らしの移り変わりとともに行事も姿を変え、あるいは消えていくのもやむを得ないのであろう。